

大イスラエル／シオニストの中東戦略

オデッド・イノン著

以下に紹介するのは、「**1980年代のイスラエルの戦略**」と題して、1982年にユダヤ教とシオニズムに関する雑誌『KIVUNIM (Directions)』第14号(1982年冬、5742年2月発行)に掲載された論文である。筆者はイスラエル外務省に勤務したジャーナリストで、核兵器の下で有限な資源の奪い合いになった世界で、イスラエルが生き延びるためには、帝國的な地域大国となって、周辺のアラブ諸国をすべて解体し、小国家に分割して支配しなければならないとする大イスラエル構想が詳述されている。ネタニアフ首相のリクードなど右派勢力の政策関連文書となったと紹介されている。(グローバルリサーチの紹介文から編集部)



大イスラエル」とは、シオニズム建国の父セオドア・ヘルツルによれば、「エジプトのブルックからユーフラテスまで」広がるユダヤ人の国家。イスラエル軍の兵士はこれを示すバッジをつけて参戦していると報道されている。

(以下本文)

1980年代の初頭、イスラエルには、自国の位置づけ、目的、国内外における**国家目標**について、**新たな視点が必要とされている**。この必要性は、国と地域、そして世界が経験している多くの重要なプロセスにより、さらに切迫したものとなっている。我々は今日、人類史上の新たな時代の初期段階に生きているが、その特性は我々がこれまで知っていたものとはまったく異なる。だから

こそ、この歴史的時代を象徴する主要なプロセスを理解する必要があるのだ。また、一方で、**新しい状況に適応した世界観と行動戦略も必要である**。ユダヤ国家の存在、繁栄、そして安定は、その内政および外交において新しい枠組みを採用する能力にかかっている。

現代の特徴は、私たちのライフスタイルの真の革命といってもよいものだ。支配的なプロセスは、**ルネサンス以来の西洋文明の生活と業績を支えてきた合理主義とヒューマニズムの崩壊**である。この基盤にたった政治、社会、経済観は、いくつかの「真実」を基盤としていたが、それが現在消えつつある。例えば、人間という個体が宇宙の中心であり、あらゆるものは人間の基本的な物質的ニーズを満たすために存在するという考え方である。この立場は、宇宙の資源量が人間の要求や経済的ニーズ、人口統計的制約をもはや満たさないことが明らかになった現在、無効となっている。40億人の人間が存在し、経済資源やエネルギー資源が人間のニーズに比例して増大しない世界において、西洋社会の主な要件、すなわち無限の消費への願望や憧れを満たすことを期待するのは非現実的である。**倫理は人間が取る方向性を決定する上で何の役割も果たさない、むしろ人間の物質的なニーズが決定するのだ**という考え方が今日、ほぼすべての価値観が消えつつある世界を見る私たちの間で広まりつつある。特に「善」と「悪」という単純な事柄を評価する能力を失いつつある。

世界秩序の崩壊を目の当たりにする中で、人間には限りない願望や能力があるという考え方は、悲しい現実を前に萎んでしまう。人類に自由と解放を約束するのは、人類の4分の3が全体主義体制の下で暮らしているという悲しい事実を踏まえると、馬鹿げたものに思える。平等と社会正義の考え方は、社会主義、特に共産主義によって嘲笑の的になった。この2つの価値観が適切に実践されてこなかったことは明らかであり、**人類の大半は自由、平等、正義の機会を失ってきた**。核（が支配する）この世界で、私たちは30年もの間、相対的な平和を享受してきたが、ソ連のような超大国が、マルクス主義の目的を達成するために核戦争は可能であり必要であるという軍事的・政治的教義を保持している限り、**国家間の平和と共存という概念は意味を持たない**。

人間社会、特に西洋社会の基本概念は、政治的、軍事的、経済的に変化しつつある。したがって、つい最近まで続いていた時代はつかの間の休息期間にな

った。いまやソ連の核および通常戦力の存在により、**多次元の大戦で世界の大部分が破壊される事態が目の前にきている**。この世界大戦は、過去の二つの世界大戦が単なる子供の遊びに過ぎなかったことを思い知らせるだろう。核兵器や通常兵器の威力、その量、精度、質により、数年以内に世界全体がひっくり返るだろう。**私たちはイスラエルでそれと向き合う態勢を整えなければならない**。それが、私たちと西洋世界の存在に対する主な脅威なのだ。3

世界には資源をめぐる戦争があり、石油はアラブに独占されている。西洋は原材料のほとんどを第三世界から輸入しなければならない。ソ連の主要な目的のひとつは、世界の鉱物の大半があるペルシャ湾とアフリカ南部の巨大な資源を支配して西側諸国を打ち負かすことである。世界は変貌しつつあり、私たちは、今後、世界規模の対立に直面するとみななければならない。

(ソ連海軍を強大化した) ゴルシコフ提督の教義は、海洋と第三世界の鉱物資源地域をソ連が支配しなければならないというものである。核戦争を操り、勝利し、生き残ることができるという現在のソ連の核戦略と併せて考えると、この戦略は、西側の軍事力が破壊され、その住民がマルクス・レーニン主義の奴隷となるような核戦争を想定している。これは、世界平和と我々の生存にとって最大の脅威である。1967年以來、ソ連はクラウゼヴィッツの言葉を「戦争は核による政策の継続である」と解釈し、すべての政策を導くモットーとしてきた。すでに今日、彼らは我々の地域および世界中で目的を遂行しようとしている。彼らに対処することが、我が国の安全保障政策と自由世界にとってどうしても必要になっている。これが我々の主要な外交上の課題である。4

したがって**アラブ・イスラム世界は、軍事力の増強でイスラエルへの主な脅威となっているものの、80年代に我々が直面する主要な戦略的問題ではない**。この地域は、レバノンや非アラブのイラン、そして今ではシリアでも見られるように、驚くほど自滅的な少数派民族、派閥、内部分裂を抱えており、その根本問題にうまく対処することができていない。したがって、長期的にはイスラエル国家に対する真の脅威とはなり得ず、短期的にのみ、その即応軍事力が大きな影響力を持つことになる。**長期的に見れば、私たちの周辺のこの世界は、真の革命的变化をとげることができず、現在の枠組みの中で存続することはできないだろう**。イスラム教徒のアラブ世界は、外国（1920年代のフランスと

イギリス) が、そこに住む人々の希望や要望を考慮しないで組み立てた仮設のトランプハウスのようなものである。それは恣意的に 19 の国家に分割され、そのすべてが互いに敵対する少数民族と民族集団の組み合わせで構成されている。そのため、今日のアラブ・イスラム国家はすべて、内側から民族社会の崩壊に直面しており、一部ではすでに内戦が勃発している。5

1 億 7000 万のアラブ人うち 1 億 1800 万人はアフリカに住んでおり、その大半はエジプト（現在の人口 4500 万人）である。そのエジプトを除き、マグレブ諸国はすべてアラブ人と非アラブのベルベル人の混成国家である。アルジェリアでは、国内の 2 つの民族の間で、カビル山脈で既に内戦が勃発している。モロッコとアルジェリアは、それぞれ国内での闘争に加え、スペイン領サハラを巡って戦争状態にある。イスラム過激派はチュニジアの統一を脅かし、カダフィは人口もまばらで強力な国家となることもできない国なのに、アラブ人の視点で破壊的な戦争をしかけている。だからこそ彼は、過去にエジプトやシリアなどとの国家統一を試みてきたのだ。

スーダンも、今日のアラブ・イスラム世界で最も分裂した国家であり、互いに敵対する 4 つのグループに分かれている。少数派のスニ派が、非アラブ系アフリカ人、異教徒、キリスト教徒の多数派を支配している。エジプトでは多数派のスニ派教徒と、上エジプトで優勢な少数派のキリスト教徒（約 700 万人）が対立している。サダト大統領でさえ 5 月 8 日の演説で、キリスト教徒が自分たちの国家を望むのではないかという懸念を表明した。

イスラエルの東に位置するアラブ諸国は、マグレブ諸国以上に分裂し、内部対立に悩まされている。シリアは、強力な軍事政権が支配しているが、それ以外はレバノンと本質的に変わらない。現在、多数派のスニ派と少数派のシーア派アラウィ（人口のわずか 12%）の間で実際に内戦が起こっている。国内問題は深刻なのだ。

イラクは、大多数がシーア派で少数派のスニ派が政権を握っているとはいえ、本質的には近隣諸国と変わらない。人口の 65% は政治に発言権がなく、20% のエリート層が権力を握っている。さらに北部には多数派のクルド人がい

て、もし現政権の強さ、軍事力、石油収入がなければ、将来はかつてのレバノンや現在のシリアと変わらないだろう。イラクのシーア派が自らの正当な指導者とみなすホメイニがイランで権力を握って以来、内紛や内戦の種はすでに明らかになっている。

湾岸諸国のすべての君主国とサウジアラビアは、石油という砂上の楼閣の上に成り立っている。クウェートでは、クウェート人は人口の4分の1しか占めていない。バーレーンでは、シーア派が多数派であるが、権力を奪われている。アラブ首長国連邦では、シーア派が多数派であるが、スンニ派が権力を握っている。オマーンと北イエメンも同様である。マルクス主義の南イエメンでさえ、かなりのシーア派の少数派がいる。サウジアラビアでは人口の半分以上が外国人（エジプト人とイエメン人）であるが、サウジアラビアの少数派が権力を握っている。

ヨルダンも、ヨルダン川西岸のベドウィン族の少数派が支配する、実質的にはパレスチナ人国家で、軍隊のほとんどと官僚はパレスチナ人である。実際、アンマンはナブルスと同じくらいパレスチナ人である。これらの国々の軍隊は比較的強力だが、そこにも問題がある。現在のシリア軍はほとんどがスンニ派なのに士官はアラウィー派だ。イラク軍もシーア派だが、スンニ派の司令官がいる。これは長期的に見ると非常に重要な意味を持つ。彼らの唯一の共通項はイスラエルに対する敵意だが、それを除いては軍の規律を長期間維持することは不可能だろう。いまでも不十分なのだ。

分裂しているアラブ諸国とともに、他のイスラム教国も同様の苦境に立たされている。イランの人口の半分はペルシャ語話者で、残りの半分はトルコ系である。トルコの人口はトルコ系スンニ派イスラム教徒が約50%を占め、その他に1200万人のシーア派アラウィー派と600万人のスンニ派クルド人の2つの大きな少数民族がいる。アフガニスタンには人口の3分の1にあたる500万人のシーア派が存在する。スンニ派のパキスタンには国の存続を脅かす1500万人のシーア派が存在する。

モロッコからインド、ソマリアからトルコにまで広がるこの民族的少数派の状況は、この地域全体に安定が欠如し、急速に退廃していることを示している。

この状況を経済状況と併せて考えると、この地域全体が、深刻な問題に耐えられない「トランプタワー」のようなものであることが分かる。

この巨大で分裂した世界には、少数の富裕層と膨大な数の貧困層が存在する。アラブ人の大半は、平均年間所得が 300 ドルである。これがエジプト、リビアを除くマグレブ諸国のほとんど、そしてイラクの状況だ。レバノンには分裂し、経済は崩壊しつつある。中央集権的な権力はなく、事実上、5 つの主権当局にわかれている（北部はキリスト教徒の支配地域と、シリアの支援を受けたフランジエ一族が支配する地域があり、東部はシリアの直接征服地域、中央にはファランヘ党が支配するキリスト教徒の飛び地がある。そして南部のリタニ川までは PLO とハダド大佐が支配するキリスト教徒と 50 万人のシーア派が住む地域がある）。シリアはさらに深刻な状況にある。リビアとの統一後に得られる支援も、大規模な軍隊の維持や生存の基本的問題に対処するには十分ではない。エジプトは最悪の状況にある。数百万人が飢餓の瀬戸際にあり、労働力の半分が失業し、世界で最も人口密度の高い地域で住宅が不足している。軍を除いては、効率的に機能している部門は一つもなく、国家は恒久的な破産状態にあり、和平以来のアメリカの対外援助に全面的に依存している。

湾岸諸国の中で、サウジアラビアとリビア、エジプトには世界最大の資金と石油が蓄積されているが、それらを享受しているのはごく一部のエリートであり、彼らは幅広い支持基盤も自信ももっておらず、軍隊もそれを保証することはできない。**7** サウジアラビア軍はすべての装備を使っても内外の危険から体制を守ることはできない。1980 年のメッカでの事件はその一例に過ぎない。

イスラエルを取り巻く、このような悲しく荒々しい状況は、イスラエルに課題やリスクをもたらしているが、一方では 1967 年以来初めて、幅広い機会をももたらしている。**当時逃した機会が、80 年代にはある程度、そして今日では想像もできないような次元で実現可能になる可能性があるのだ。**

米国に依存して「平和」と領土を取引するという政策は、我々にとって新たな選択肢の障害となる。イスラエルの歴代政府は 1967 年以来、一方では国家目標を狭い政治的必要性に縛り付け、他方では国内の反対意見によって、国内外における国力を棄損してきた。押し付けられた戦争の結果として獲得した新領

土内のアラブ系住民に何ら手を打たなかったことは、6日戦争直後にイスラエルが犯した最大の戦略的過ちである。**ヨルダン川の西側に住むパレスチナ人にヨルダンを与えていたら、それ以来の苦しく危険な紛争をすべて回避することができたはずである。**そうすれば、今日私たちが直面しているパレスチナ問題を一掃することができただろう。この問題に対しては、実際には解決策などないにもかかわらず、領土の譲歩や自治といった解決策が模索されてきた。**8** 今日、私たちの前には突如として状況を打開する絶好の機会が現れている。この変革を今後10年以内に成し遂げなければならない。さもなければ国家として生き残ることはできないだろう。

イスラエルは1980年代の間に、新しい時代の世界的および地域的な課題に立ち向かうために、国内の政治・経済体制を広範囲に変革し、外交政策を抜本的に変えなければならない。スエズ運河の石油田、および地質学的に同様の地域にあるシナイ半島の膨大な石油、ガス、その他の天然資源の潜在能力を失えば、近い将来エネルギー不足を招き、国内経済を破壊することになるだろう。現在のGNPの4分の1、予算の3分の1が石油の購入に充てられている。**9** ネゲブや沿岸部で原材料を探索しても、近い将来、この状況を変えることはないだろう。

したがって**潜在的な資源のあるシナイ半島を取り戻すことは、政治的な優先事項である。それがキャンプ・デービッドや平和条約によって妨げられている。**その責任は、現在のイスラエル政府と、領土譲歩政策への道筋を作った1967年以降の歴代政府にある。シナイ半島が返った後は、エジプトは平和条約を維持する必要がなくなるだろう。そして、アラブ世界とソ連の傘下に戻り、支援と軍事援助を得るために全力を尽くすだろう。アメリカの援助は暫定的にしか保証されない。平和条約に条件があるのと、アメリカが内外で弱体化し、援助が削減されるためだ。石油とそこから得られる収入がなければ、我々は、現在の莫大な支出により、現状では1982年を乗り切ることはできず、1979年3月にサダト大統領との間で結ばれた誤った和平協定と、サダト大統領のシナイ訪問以前のシナイ半島の状態に立ち戻る行動を取らざるを得ないだろう。**10**

イスラエルには、この目的を達成するための2つの主要なルートがある。1つは直接的なもので、もう1つは間接的なものである。直接的な選択肢は、イス

ラエルの政権と政府の性質、サダトの英知からいってあまり現実的ではない。彼はシナイ半島からの撤退を実現させたが、それは政権発足以来の功績で、1973年の戦争に次ぐものだった。イスラエルは、今日も1982年も、経済的にも政治的にも非常に追い詰められ、エジプトがイスラエルにシナイ半島を奪還する口実を与えない限り、一方的に条約を破棄することはないだろう。したがって残された選択肢は間接的なものとなる。エジプトの経済状況、政権の性質、そしてその汎アラブ政策により、1982年4月以降、イスラエルはシナイ半島を戦略上、経済上、そして長期的なエネルギー備蓄として再び支配権を握るために、直接的または間接的に行動せざるを得ない状況が生まれるだろう。エジプトは国内紛争により軍事戦略上の問題とはならず、一日もかからずに、1967年以降の戦争状態に逆戻りする可能性もある。

エジプトがアラブ世界の強力な指導者であるという神話は、1956年にすでに崩壊しており、1967年には確実に消滅していた。しかし、シナイ半島返還に見られるように、我が国の政策が神話を「事実」に変えてしまった。実際には、イスラエルとアラブ諸国全体に対するエジプトの影響力は、1967年以降、約50パーセント低下している。エジプトはすでにアラブ世界における政治的指導力を失い、経済的にも危機的状況に陥っている。外国からの援助がなければ、その危機は明日にも訪れるだろう。12 シナイ半島の返還により、短期的にはイスラエルの犠牲でいくつかの利益を得るだろうが、それは1982年までで、勢力バランスを有利に変えることはなく、おそらく没落するだろう。現在の国内政治情勢をみれば、エジプトはすでに死体同然である。イスラム教徒とキリスト教徒の溝が深まっており、その傾向はさらに強まるだろう。エジプトを地理的に明確な地域に分割することは、1980年代におけるイスラエルの政治的目標である。

エジプトは分裂し、多くの権力拠点に引き裂かれることになる。エジプトが分裂すれば、リビアやスーダン、あるいはもっと遠い国々も、現在の形では存続できず、エジプトの崩壊と解体に巻き込まれることになるだろう。キリスト教徒のコプト人が多数を占める上エジプトと、中央政府を持たない弱小国家がいくつか並存する、という構想は、今日まで中央政府を持たない地域的な権力を持つ弱小国家が多数存在しているという歴史的展開の鍵となるものであり、

和平合意によって一時的に後退したものの、長期的には避けられないものと思われる。 13

西部戦線は表面は問題が多いように見えるが、実際は、東部戦線の方がより複雑で、最近は大々報じられる事件が起こっている。レバノンが5つの州に完全に解体されたことは、エジプト、シリア、イラク、アラビア半島を含むアラブ世界全体にとって先例となり、すでにその道をたどりつつある。シリアとイラクがレバノンと同様に民族や宗教ごとに独自の地域に解体されることは、イスラエルが東部戦線で長期的に第一に狙っていることである。一方、これらの国家の軍事力の解体は、短期的な第一目標である。シリアは、その民族構成と宗教的背景に従って、現在のレバノンと同様にいくつかの国家に分裂するだろう。その結果、シリアの海岸沿いにはシーア派の Alawi 国家が、アレッポ地域にはスンニ派国家が、ダマスカスには北部の隣国と敵対するもう一つのスンニ派国家が、そしてドゥルーズ派は、おそらくゴラン高原にも、またハウラン高原やヨルダン北部にも国家を樹立するだろう。このような状態が長期的にはこの地域の平和と安全を保証することになる。そして、その目的はすでに今日、手の届くところにある。 14

石油資源に恵まれている一方で国内が分裂しているイラクは、確実にイスラエルの標的候補になっている。シリアの解体よりも、イラクの解体の方が我々にとってはより重要である。イラクはシリアよりも強い。短期的には、イラクの力がイスラエルにとって最大の脅威となる。イラクとイランの戦争はイラクを分裂させ、イラクが我々に対して広範な戦線を組織する前に、国内で崩壊を引き起こすだろう。アラブ間のあらゆる対立は、短期的には我々を助けることになり、イラクをシリアやレバノンのように宗派に分裂させるという重要な目的への道のりを短くする。イラクでは、オスマン帝国時代のシリアのように、民族・宗教を基盤とした州への分割が可能である。つまり、バスラ、バグダッド、モスルの3つの主要都市の周辺に3つの国家が存在することになり、南部のシーア派地域は北部のスンニ派およびクルド人地域から分離することになる。現在のイランとイラクの対立が、この二極化をさらに深める可能性もある。

アラビア半島全体は、内外からの圧力により解体される自然な候補地であり、特にサウジアラビアではその可能性は避けられない。石油を基盤とする経済力がそのまま維持されるか、あるいは長期的に衰退するかどうかに関わらず、現在の政治構造を考慮すれば、内部の分裂と崩壊は明白かつ自然な展開である。

ヨルダンには短期的には即座の戦略的ターゲットとなるが、長期的にはそうではない。なぜなら、フセイン国王の長年の統治が終焉し、短期的にはパレスチナ人に権力が移譲された後は、長期的には現実的な脅威とはならないからだ。

ヨルダンが現在の体制で長期間存続する可能性は全くな。イスラエルの政策は、戦時・平時を問わず、現体制下のヨルダンの清算とパレスチナ人多数派への権力移譲を目的とすべきである。ヨルダン川の東側で体制を変更することは、ヨルダン川の西側に人口密度の高いアラブ人居住地域の問題を解消することにもなる。戦争下であろうと平和下であろうと、ヨルダン川西岸地区からの移住と経済人口の凍結は、川の両岸で起こる変化の保証であり、私たちは近い将来にこのプロセスを加速させるため積極的に行動すべきである。PLOの計画やイスラエルのアラブ人自身の計画、1980年9月のシーファ・アムル計画を考慮すると、自治計画は拒否されるべきであり、また、いかなる妥協や領土分割も拒否されるべきである。なぜなら、アラブ人はヨルダンに、ユダヤ人はヨルダン川西岸地区に、というように、2つの民族を分離させない限り、現状ではこの国に住み続けることは不可能だからである。ヨルダン川から海までの地域がユダヤ人の支配下にならなければ、自分たちの存在も安全も確保できないことをアラブ人が理解したときにのみ、真の共存と平和がこの地に訪れるだろう。自分たちの国と安全はヨルダンにのみ存在する。17

イスラエル国内では、1967年の境界線とそれより西側の1948年の領土との区別は、アラブ人にとってはまったく意味のないものであり、今日では私たちにとっても意味のないものとなっている。この問題は、1967年の境界線などという区切りを設けずに、全体として捉えるべきである。将来の政治情勢や軍事状況がどうなるろうとも、先住アラブ人の問題の解決策は、ヨルダン川とその向こう側まで安全な国境線でイスラエルの存在を認めること、すなわち、我々が間もなく突入する核時代という困難な時代において、我々の生存に必要なこととしてのみ、実現可能となることは明白である。核時代において、危険なほ

ど人口密度の高い海岸線にユダヤ人の人口の4分の3が住み続けることは、もはや不可能である。

したがって、人口の分散は国内における最重要戦略目標である。さもなければ、いかなる国境線内においても、我々は存在しえなくなるだろう。ユダヤ、サマリア、ガリラヤは、国家の存続を保証する唯一のものであり、山岳地帯で多数派とならなければ、この国を統治することはできず、十字軍のようになってしまうだろう。十字軍は、もともと自分たちの国ではなかったこの国を失ったのであり、そもそも外国人であった。人口動態、戦略、経済の面で国内の均衡を回復することが、今日最も重要で中心的な目的である。ベエルシェバから上ガリラヤまでの山岳地帯の水源を確保することが、今日ユダヤ人がいない国内の山岳地帯に定住するという主要な戦略的考慮から生み出された国家目標である。

東部戦線における我々の目標の実現は、まず第一に、この国内戦略目標の実現にかかっている。これらの戦略目標の実現を可能にするための政治・経済構造の転換が、全体的な変化を達成するための鍵である。政府が広く関与する中央集権経済から、開放的な自由市場へと転換し、米国の納税者に依存するのではなく、自らの手で真の生産的な経済インフラを開発する必要がある。もし、この変化を自由意志に基づいて行うことができないとしても、世界情勢、特に経済、エネルギー、政治面での世界の動きや、自らの孤立化によって、そうせざるを得なくなるだろう。

軍事的・戦略的な観点から見ると、米国を中心とする西側諸国は、世界中でソ連がもたらす圧力に抵抗することができない。したがって、イスラエルは80年代には外国からの軍事的・経済的支援を受けずに単独で立ち向かわなければならない。これは、妥協することなく我々の能力の範囲内である。20世界の急速な変化は、世界のユダヤ人の状況にも変化をもたらし、イスラエルは最後の頼みの綱であるだけでなく、唯一の現実的な選択肢となるだろう。我々は、米国のユダヤ人やヨーロッパ、ラテンアメリカのコミュニティが将来も現在の形で存続し続けると考えることはできない。21

この国における我々の存在自体は確実であり、強制的に、あるいは裏切り（サダトの手法）によって我々をこの国から追い出すことのできる力は存在しな

い。誤った「平和」政策や、イスラエル・アラブ人および領土問題の難題はあるものの、我々は近い将来、これらの問題に効果的に対処することができるだろう。

結論

このシオニストの中東計画の実現の可能性を理解し、また、なぜこの計画が公表されなければならなかったのかを理解するためには、3つの重要な点を明らかにする必要がある。

計画の軍事的背景

この計画の軍事的状況については、これまで触れてこなかったが、イスラエル政府のメンバーを対象とした非公開会議で、これとよく似た内容が「説明」されたことが数多くあり、この点については明確にされている。イスラエル軍の全軍事部門において、上述のような広大な領土の占領という実際の作業には不十分であると想定される。実際、ヨルダン川西岸地区でパレスチナ人の「暴動」が激しい時期でさえ、イスラエル軍部隊はあまりにも広範囲に展開している。それにたいする答えは、「ハダド部隊」や「村の会」（「村の同盟」とも呼ばれる）による統治方法である。住民とは完全に切り離された「指導者」の下にある地方部隊であり、封建的あるいは政党的な構造（例えばファランヘイトのような）さえ持っていない。イノンが提案する「国家」は「ハダドランド」と「村の会」であり、その軍隊も同様であることは間違いない。さらに、このような状況下では**イスラエルの軍事的優位性は現在よりもはるかに高まるため、反乱の動きは、ヨルダン川西岸地区やガザ地区のように集団的な屈辱によって、あるいはレバノン（1982年6月）のように都市への爆撃や消滅によって、あるいはその両方によって「罰せられる」ことになるだろう。**これを確実にするために、口頭で説明された計画では、必要な機動破壊部隊を配備したイスラエル軍の駐屯地を、ミニ国家間の要衝に設置することが求められている。実際、ハダドランドでこれに似たものを目にしており、南レバノンまたはレバノン全土のいずれかで、このシステムの最初の事例が間もなく機能し始めることはほぼ確実である。

上記の軍事的想定と全体的な計画は、アラブ人が今以上に分裂し続けていること、そして内部に真に前進的な大衆運動が存在しないことに依存していることは明らかである。この2つの条件が取り除かれるのは、計画がかなり進展し、予見できない結果が生じたときだけかもしれない。

なぜこれをイスラエルで公表する必要があるのか？

公表の理由は、イスラエル・ユダヤ社会の二面性にある。すなわち、ユダヤ人にとっては特に、非常に大きな自由と民主主義の度合いが、拡張主義と人種差別と結びついていることである。このような状況下では、イスラエル・ユダヤのエリート層（大衆はテレビとベギンの演説に従う）を説得しなければならない。説得の第一歩は口頭によるものだが、やがてそれでは都合が悪くなる時が来る。より愚かな「説得者」や「説明者」（例えば、通常、著しく愚かな中級士官）のためには、書面による資料を作成しなければならない。彼らはそれを「ある程度」理解し、他の人々に説教する。イスラエル、そして20年代からのイシュブ（イスラエル建国以前のユダヤ人入植地）でさえ、常にこのような方法で機能してきたことを指摘しておくべきだろう。私自身、（「反対派」になる前に）1956年の戦争の1年前に、戦争の必要性について説明されたことをよく覚えている。また、1965年から67年の間には、「機会があれば、残りの西パレスチナを征服する」ことの必要性が説明された。

このような計画の公表に際して、外部からの特別なリスクはないと想定されているのはなぜか？

イスラエル国内の原則的な反対勢力が非常に弱い限り（レバノン戦争の結果状況が変わる可能性もある）、このようなリスクは2つの要因から生じる。パレスチナ人を含むアラブ世界と米国だ。アラブ諸国はこれまで、イスラエル・ユダヤ社会についての詳細かつ理性的な分析を行う能力が全くないことを示しており、パレスチナ人も平均的にはそれ以下である。このような状況下では、イスラエルの拡張主義の危険性を叫ぶ人々（その危険性は十分に現実的なものである）でさえ、事実に基づく詳細な知識ではなく、神話への信仰に基づいて主張している。その良い例が、イスラエル国会議事堂の壁に書かれているという、ナイル川とユーフラテス川に関する聖書の節についての、根強く存在する、しかし実際には存在しない信念である。もう一つの例は、イスラエルの国

旗の青い2本のストライプはナイル川とユーフラテス川を象徴しているという、全くの誤りであるにもかかわらず、一部のアラブの指導者たちが繰り返し主張していることである。実際には、この2本のストライプはユダヤ教の祈禱用ショール（タリート）のストライプから取られたものである。イスラエルの専門家たちは、アラブ人は自分たちの将来に関する真剣な議論にはまったく注意を払わないと考えており、レバノン戦争はその想定が正しかったことを証明した。だから彼らは他のイスラエル人を説得する従来のやり方を変える必要がまったくないのだ。

米国では、少なくとも現在までは、非常に似た状況が存在している。イスラエルに関する意見を述べる多くの論者は、その情報や意見の多くを2つの情報源から得ている。1つは、イスラエルを賞賛するユダヤ人によって書かれた「リベラル派」の米国報道機関の記事である。彼らは、イスラエル国家のいくつかの側面を批判するが、スターリンがかつて「建設的批判」と呼んだものを忠実に実践している。（実際、彼らの中には「反スターリン主義者」を名乗る者もいるが、彼らは実際にはスターリンよりもスターリン主義的であり、イスラエルを神として崇拝している。このような批判的崇拝の枠組みでは、イスラエルは常に「善意」を持ち、「過ちを犯す」だけであると考えられ、したがってこのような計画は議論の対象とはならない。もう一つの情報源である「エルサレム・ポスト」紙も同様の方針を取っている。したがって、イスラエルが世界に対して「閉鎖社会」であるという状況が続く限り、世界が目を背けている限り、このような計画の公表や、その計画の実現に向けた取り組みの開始さえも現実的であり、実行可能なのだ。

1982年6月17日 エルサレム

【翻訳チェック 田中靖宏】

以下は英文

https://www.academia.edu/24440194/_Greater_Israel_The_Zionist_Plan_for_the_Middle_East

A Strategy for Israel in the Nineteen Eighties

by Oded Yinon

This essay originally appeared in Hebrew in KIVUNIM (Directions), A Journal for Judaism and Zionism; Issue No, 14--Winter, 5742, February 1982, Editor: Yoram Beck. Editorial Committee: Eli Eyal, Yoram Beck, Amnon Hadari, Yohanan Manor, Elieser Schweid. Published by the Department of Publicity/The World Zionist Organization, Jerusalem.

At the outset of the nineteen eighties the State of Israel is in need of a new perspective as to its place, its aims and national targets, at home and abroad. This need has become even more vital due to a number of central processes which the country, the region and the world are undergoing. We are living today in the early stages of a new epoch in human history which is not at all similar to its predecessor, and its characteristics are totally different from what we have hitherto known. That is why we need an understanding of the central processes which typify this historical epoch on the one hand, and on the other hand we need a world outlook and an operational strategy in accordance with the new conditions. The existence, prosperity and steadfastness of the Jewish state will depend upon its ability to adopt a new framework for its domestic and foreign affairs.

This epoch is characterized by several traits which we can already diagnose, and which symbolize a genuine revolution in our present lifestyle. The dominant process is the breakdown of the rationalist, humanist outlook as the major cornerstone supporting the life and achievements of Western civilization since the Renaissance. The political, social and economic views which have emanated from this foundation have been based on several "truths" which are presently disappearing--for example, the view that man as an individual is the center of the universe and everything exists in order to fulfill his basic material needs. This position is being invalidated in the present when it has become clear that the amount of resources in the cosmos does not meet Man's requirements, his economic needs or his demographic constraints. In a world in which there are four billion human beings and economic and energy resources which do not grow proportionally to meet the needs of mankind, it is unrealistic to expect to fulfill the main requirement of Western Society,1 i.e., the wish and aspiration for boundless consumption. The view that ethics plays no part in determining the direction Man takes, but rather his material needs do--that view is becoming prevalent today as we see a world in which nearly all values are disappearing. We are losing the ability to assess the simplest things,

especially when they concern the simple question of what is Good and what is Evil.

The vision of man's limitless aspirations and abilities shrinks in the face of the sad facts of life, when we witness the break-up of world order around us. The view which promises liberty and freedom to mankind seems absurd in light of the sad fact that three fourths of the human race lives under totalitarian regimes. The views concerning equality and social justice have been transformed by socialism and especially by Communism into a laughing stock. There is no argument as to the truth of these two ideas, but it is clear that they have not been put into practice properly and the majority of mankind has lost the liberty, the freedom and the opportunity for equality and justice. In this nuclear world in which we are (still) living in relative peace for thirty years, the concept of peace and coexistence among nations has no meaning when a superpower like the USSR holds a military and political doctrine of the sort it has: that not only is a nuclear war possible and necessary in order to achieve the ends of Marxism, but that it is possible to survive after it, not to speak of the fact that one can be victorious in it.²

The essential concepts of human society, especially those of the West, are undergoing a change due to political, military and economic transformations. Thus, the nuclear and conventional might of the USSR has transformed the epoch that has just ended into the last respite before the great saga that will demolish a large part of our world in a multi-dimensional global war, in comparison with which the past world wars will have been mere child's play. The power of nuclear as well as of conventional weapons, their quantity, their precision and quality will turn most of our world upside down within a few years, and we must align ourselves so as to face that in Israel. That is, then, the main threat to our existence and that of the Western world.³ The war over resources in the world, the Arab monopoly on oil, and the need of the West to import most of its raw materials from the Third World, are transforming the world we know, given that one of the major aims of the USSR is to defeat the West by gaining control over the gigantic resources in the Persian Gulf and in the southern part of Africa, in which the majority of world minerals are located. We can imagine the dimensions of the global confrontation which will face us in the future.

The Gorshkov doctrine calls for Soviet control of the oceans and mineral rich areas of the Third World. That together with the present Soviet nuclear doctrine which holds that it is possible to manage, win and survive a nuclear war, in the course of which the West's military might well be destroyed and its inhabitants made slaves in the service of

Marxism-Leninism, is the main danger to world peace and to our own existence. Since 1967, the Soviets have transformed Clausewitz' dictum into "War is the continuation of policy in nuclear means," and made it the motto which guides all their policies. Already today they are busy carrying out their aims in our region and throughout the world, and the need to face them becomes the major element in our country's security policy and of course that of the rest of the Free World. That is our major foreign challenge.⁴

The Arab Moslem world, therefore, is not the major strategic problem which we shall face in the Eighties, despite the fact that it carries the main threat against Israel, due to its growing military might. This world, with its ethnic minorities, its factions and internal crises, which is astonishingly self-destructive, as we can see in Lebanon, in non-Arab Iran and now also in Syria, is unable to deal successfully with its fundamental problems and does not therefore constitute a real threat against the State of Israel in the long run, but only in the short run where its immediate military power has great import. In the long run, this world will be unable to exist within its present framework in the areas around us without having to go through genuine revolutionary changes. The Moslem Arab World is built like a temporary house of cards put together by foreigners (France and Britain in the Nineteen Twenties), without the wishes and desires of the inhabitants having been taken into account. It was arbitrarily divided into 19 states, all made of combinations of minorities and ethnic groups which are hostile to one another, so that every Arab Moslem state nowadays faces ethnic social destruction from within, and in some a civil war is already raging.⁵ Most of the Arabs, 118 million out of 170 million, live in Africa, mostly in Egypt (45 million today).

Apart from Egypt, all the Maghreb states are made up of a mixture of Arabs and non-Arab Berbers. In Algeria there is already a civil war raging in the Kabile mountains between the two nations in the country. Morocco and Algeria are at war with each other over Spanish Sahara, in addition to the internal struggle in each of them. Militant Islam endangers the integrity of Tunisia and Qaddafi organizes wars which are destructive from the Arab point of view, from a country which is sparsely populated and which cannot become a powerful nation. That is why he has been attempting unifications in the past with states that are more genuine, like Egypt and Syria. Sudan, the most torn apart state in the Arab Moslem world today is built upon four groups hostile to each other, an Arab Moslem Sunni minority which rules over a majority of non-Arab Africans, Pagans, and Christians. In Egypt there is a Sunni Moslem majority facing a large minority of Christians which is dominant in upper Egypt: some 7 million of them, so that even Sadat,

in his speech on May 8, expressed the fear that they will want a state of their own, something like a "second" Christian Lebanon in Egypt.

All the Arab States east of Israel are torn apart, broken up and riddled with inner conflict even more than those of the Maghreb. Syria is fundamentally no different from Lebanon except in the strong military regime which rules it. But the real civil war taking place nowadays between the Sunni majority and the Shi'ite Alawi ruling minority (a mere 12% of the population) testifies to the severity of the domestic trouble.

Iraq is, once again, no different in essence from its neighbors, although its majority is Shi'ite and the ruling minority Sunni. Sixty-five percent of the population has no say in politics, in which an elite of 20 percent holds the power. In addition there is a large Kurdish minority in the north, and if it weren't for the strength of the ruling regime, the army and the oil revenues, Iraq's future state would be no different than that of Lebanon in the past or of Syria today. The seeds of inner conflict and civil war are apparent today already, especially after the rise of Khomeini to power in Iran, a leader whom the Shi'ites in Iraq view as their natural leader.

All the Gulf principalities and Saudi Arabia are built upon a delicate house of sand in which there is only oil. In Kuwait, the Kuwaitis constitute only a quarter of the population. In Bahrain, the Shi'ites are the majority but are deprived of power. In the UAE, Shi'ites are once again the majority but the Sunnis are in power. The same is true of Oman and North Yemen. Even in the Marxist South Yemen there is a sizable Shi'ite minority. In Saudi Arabia half the population is foreign, Egyptian and Yemenite, but a Saudi minority holds power.

Jordan is in reality Palestinian, ruled by a Trans-Jordanian Bedouin minority, but most of the army and certainly the bureaucracy is now Palestinian. As a matter of fact Amman is as Palestinian as Nablus. All of these countries have powerful armies, relatively speaking. But there is a problem there too. The Syrian army today is mostly Sunni with an Alawi officer corps, the Iraqi army Shi'ite with Sunni commanders. This has great significance in the long run, and that is why it will not be possible to retain the loyalty of the army for a long time except where it comes to the only common denominator: The hostility towards Israel, and today even that is insufficient.

Alongside the Arabs, split as they are, the other Moslem states share a similar

predicament. Half of Iran's population is comprised of a Persian speaking group and the other half of an ethnically Turkish group. Turkey's population comprises a Turkish Sunni Moslem majority, some 50%, and two large minorities, 12 million Shi'ite Alawis and 6 million Sunni Kurds. In Afghanistan there are 5 million Shi'ites who constitute one third of the population. In Sunni Pakistan there are 15 million Shi'ites who endanger the existence of that state.¹³

This national ethnic minority picture extending from Morocco to India and from Somalia to Turkey points to the absence of stability and a rapid degeneration in the entire region. When this picture is added to the economic one, we see how the entire region is built like a house of cards, unable to withstand its severe problems.

In this giant and fractured world there are a few wealthy groups and a huge mass of poor people. Most of the Arabs have an average yearly income of 300 dollars. That is the situation in Egypt, in most of the Maghreb countries except for Libya, and in Iraq. Lebanon is torn apart and its economy is falling to pieces. It is a state in which there is no centralized power, but only 5 de facto sovereign authorities (Christian in the north, supported by the Syrians and under the rule of the Franjeh clan, in the East an area of direct Syrian conquest, in the center a Phalangist controlled Christian enclave, in the south and up to the Litani river a mostly Palestinian region controlled by the PLO and Major Haddad's state of Christians and half a million Shi'ites). Syria is in an even graver situation and even the assistance she will obtain in the future after the unification with Libya will not be sufficient for dealing with the basic problems of existence and the maintenance of a large army. Egypt is in the worst situation: Millions are on the verge of hunger, half the labor force is unemployed, and housing is scarce in this most densely populated area of the world. Except for the army, there is not a single department operating efficiently and the state is in a permanent state of bankruptcy and depends entirely on American foreign assistance granted since the peace.⁶

In the Gulf states, Saudi Arabia, Libya and Egypt there is the largest accumulation of money and oil in the world, but those enjoying it are tiny elites who lack a wide base of support and self-confidence, something that no army can guarantee.⁷ The Saudi army with all its equipment cannot defend the regime from real dangers at home or abroad, and what took place in Mecca in 1980 is only an example. A sad and very stormy situation surrounds Israel and creates challenges for it, problems, risks but also far-reaching opportunities for the first time since 1967. Chances are that opportunities missed at that

time will become achievable in the Eighties to an extent and along dimensions which we cannot even imagine today.

The "peace" policy and the return of territories, through a dependence upon the US, precludes the realization of the new option created for us. Since 1967, all the governments of Israel have tied our national aims down to narrow political needs, on the one hand, and on the other to destructive opinions at home which neutralized our capacities both at home and abroad. Failing to take steps towards the Arab population in the new territories, acquired in the course of a war forced upon us, is the major strategic error committed by Israel on the morning after the Six Day War. We could have saved ourselves all the bitter and dangerous conflict since then if we had given Jordan to the Palestinians who live west of the Jordan river. By doing that we would have neutralized the Palestinian problem which we nowadays face, and to which we have found solutions that are really no solutions at all, such as territorial compromise or autonomy which amount, in fact, to the same thing.⁸ Today, we suddenly face immense opportunities for transforming the situation thoroughly and this we must do in the coming decade, otherwise we shall not survive as a state.

In the course of the Nineteen Eighties, the State of Israel will have to go through far-reaching changes in its political and economic regime domestically, along with radical changes in its foreign policy, in order to stand up to the global and regional challenges of this new epoch. The loss of the Suez Canal oil fields, of the immense potential of the oil, gas and other natural resources in the Sinai peninsula which is geomorphologically identical to the rich oil-producing countries in the region, will result in an energy drain in the near future and will destroy our domestic economy: one quarter of our present GNP as well as one third of the budget is used for the purchase of oil. ⁹ The search for raw materials in the Negev and on the coast will not, in the near future, serve to alter that state of affairs.

(Regaining) the Sinai peninsula with its present and potential resources is therefore a political priority which is obstructed by the Camp David and the peace agreements. The fault for that lies of course with the present Israeli government and the governments which paved the road to the policy of territorial compromise, the Alignment governments since 1967. The Egyptians will not need to keep the peace treaty after the return of the Sinai, and they will do all they can to return to the fold of the Arab world and to the USSR in order to gain support and military assistance. American aid is guaranteed only

for a short while, for the terms of the peace and the weakening of the U.S. both at home and abroad will bring about a reduction in aid. Without oil and the income from it, with the present enormous expenditure, we will not be able to get through 1982 under the present conditions and we will have to act in order to return the situation to the status quo which existed in Sinai prior to Sadat's visit and the mistaken peace agreement signed with him in March 1979. 10

Israel has two major routes through which to realize this purpose, one direct and the other indirect. The direct option is the less realistic one because of the nature of the regime and government in Israel as well as the wisdom of Sadat who obtained our withdrawal from Sinai, which was, next to the war of 1973, his major achievement since he took power. Israel will not unilaterally break the treaty, neither today, nor in 1982, unless it is very hard pressed economically and politically and Egypt provides Israel with the excuse to take the Sinai back into our hands for the fourth time in our short history. What is left therefore, is the indirect option. The economic situation in Egypt, the nature of the regime and its pan-Arab policy, will bring about a situation after April 1982 in which Israel will be forced to act directly or indirectly in order to regain control over Sinai as a strategic, economic and energy reserve for the long run. Egypt does not constitute a military strategic problem due to its internal conflicts and it could be driven back to the post 1967 war situation in no more than one day.¹¹

The myth of Egypt as the strong leader of the Arab World was demolished back in 1956 and definitely did not survive 1967, but our policy, as in the return of the Sinai, served to turn the myth into "fact." In reality, however, Egypt's power in proportion both to Israel alone and to the rest of the Arab World has gone down about 50 percent since 1967. Egypt is no longer the leading political power in the Arab World and is economically on the verge of a crisis. Without foreign assistance the crisis will come tomorrow.¹² In the short run, due to the return of the Sinai, Egypt will gain several advantages at our expense, but only in the short run until 1982, and that will not change the balance of power to its benefit, and will possibly bring about its downfall. Egypt, in its present domestic political picture, is already a corpse, all the more so if we take into account the growing Moslem-Christian rift. Breaking Egypt down territorially into distinct geographical regions is the political aim of Israel in the Nineteen Eighties on its Western front.

Egypt is divided and torn apart into many foci of authority. If Egypt falls apart, countries

like Libya, Sudan or even the more distant states will not continue to exist in their present form and will join the downfall and dissolution of Egypt. The vision of a Christian Coptic State in Upper Egypt alongside a number of weak states with very localized power and without a centralized government as to date, is the key to a historical development which was only set back by the peace agreement but which seems inevitable in the long run. 13

The Western front, which on the surface appears more problematic, is in fact less complicated than the Eastern front, in which most of the events that make the headlines have been taking place recently. Lebanon's total dissolution into five provinces serves as a precedent for the entire Arab world including Egypt, Syria, Iraq and the Arabian peninsula and is already following that track. The dissolution of Syria and Iraq later on into ethnically or religiously unique areas such as in Lebanon, is Israel's primary target on the Eastern front in the long run, while the dissolution of the military power of those states serves as the primary short term target. Syria will fall apart, in accordance with its ethnic and religious structure, into several states such as in present day Lebanon, so that there will be a Shi'ite Alawi state along its coast, a Sunni state in the Aleppo area, another Sunni state in Damascus hostile to its northern neighbor, and the Druzes who will set up a state, maybe even in our Golan, and certainly in the Hauran and in northern Jordan. This state of affairs will be the guarantee for peace and security in the area in the long run, and that aim is already within our reach today. 14

Iraq, rich in oil on the one hand and internally torn on the other, is guaranteed as a candidate for Israel's targets. Its dissolution is even more important for us than that of Syria. Iraq is stronger than Syria. In the short run it is Iraqi power which constitutes the greatest threat to Israel. An Iraqi-Iranian war will tear Iraq apart and cause its downfall at home even before it is able to organize a struggle on a wide front against us. Every kind of inter-Arab confrontation will assist us in the short run and will shorten the way to the more important aim of breaking up Iraq into denominations as in Syria and in Lebanon. In Iraq, a division into provinces along ethnic/religious lines as in Syria during Ottoman times is possible. So, three (or more) states will exist around the three major cities: Basra, Baghdad and Mosul, and Shi'ite areas in the south will separate from the Sunni and Kurdish north. It is possible that the present Iranian-Iraqi confrontation will deepen this polarization.15

The entire Arabian peninsula is a natural candidate for dissolution due to internal and

external pressures, and the matter is inevitable especially in Saudi Arabia. Regardless of whether its economic might based on oil remains intact or whether it is diminished in the long run, the internal rifts and breakdowns are a clear and natural development in light of the present political structure.¹⁶

Jordan constitutes an immediate strategic target in the short run but not in the long run, for it does not constitute a real threat in the long run after its dissolution, the termination of the lengthy rule of King Hussein and the transfer of power to the Palestinians in the short run.

There is no chance that Jordan will continue to exist in its present structure for a long time, and Israel's policy, both in war and in peace, ought to be directed at the liquidation of Jordan under the present regime and the transfer of power to the Palestinian majority. Changing the regime east of the river will also cause the termination of the problem of the territories densely populated with Arabs west of the Jordan. Whether in war or under conditions of peace, emigration from the territories and economic demographic freeze in them, are the guarantees for the coming change on both banks of the river, and we ought to be active in order to accelerate this process in the nearest future. The autonomy plan ought also to be rejected, as well as any compromise or division of the territories for, given the plans of the PLO and those of the Israeli Arabs themselves, the Shefa'amr plan of September 1980, it is not possible to go on living in this country in the present situation without separating the two nations, the Arabs to Jordan and the Jews to the areas west of the river. Genuine coexistence and peace will reign over the land only when the Arabs understand that without Jewish rule between the Jordan and the sea they will have neither existence nor security. A nation of their own and security will be theirs only in Jordan.¹⁷

Within Israel the distinction between the areas of '67 and the territories beyond them, those of '48, has always been meaningless for Arabs and nowadays no longer has any significance for us. The problem should be seen in its entirety without any divisions as of '67. It should be clear, under any future political situation or military constellation, that the solution of the problem of the indigenous Arabs will come only when they recognize the existence of Israel in secure borders up to the Jordan river and beyond it, as our existential need in this difficult epoch, the nuclear epoch which we shall soon enter. It is no longer possible to live with three fourths of the Jewish population on the dense shoreline which is so dangerous in a nuclear epoch.

Dispersal of the population is therefore a domestic strategic aim of the highest order; otherwise, we shall cease to exist within any borders. Judea, Samaria and the Galilee are our sole guarantee for national existence, and if we do not become the majority in the mountain areas, we shall not rule in the country and we shall be like the Crusaders, who lost this country which was not theirs anyhow, and in which they were foreigners to begin with. Rebalancing the country demographically, strategically and economically is the highest and most central aim today. Taking hold of the mountain watershed from Beersheba to the Upper Galilee is the national aim generated by the major strategic consideration which is settling the mountainous part of the country that is empty of Jews today. 18

Realizing our aims on the Eastern front depends first on the realization of this internal strategic objective. The transformation of the political and economic structure, so as to enable the realization of these strategic aims, is the key to achieving the entire change. We need to change from a centralized economy in which the government is extensively involved, to an open and free market as well as to switch from depending upon the U.S. taxpayer to developing, with our own hands, of a genuine productive economic infrastructure. If we are not able to make this change freely and voluntarily, we shall be forced into it by world developments, especially in the areas of economics, energy, and politics, and by our own growing isolation.19

From a military and strategic point of view, the West led by the U.S. is unable to withstand the global pressures of the USSR throughout the world, and Israel must therefore stand alone in the Eighties, without any foreign assistance, military or economic, and this is within our capacities today, with no compromises.20 Rapid changes in the world will also bring about a change in the condition of world Jewry to which Israel will become not only a last resort but the only existential option. We cannot assume that U.S. Jews, and the communities of Europe and Latin America will continue to exist in the present form in the future. 21

Our existence in this country itself is certain, and there is no force that could remove us from here either forcefully or by treachery (Sadat's method). Despite the difficulties of the mistaken "peace" policy and the problem of the Israeli Arabs and those of the territories, we can effectively deal with these problems in the foreseeable future.

Conclusion

Three important points have to be clarified in order to be able to understand the significant possibilities of realization of this Zionist plan for the Middle East, and also why it had to be published.

The Military Background of The Plan

The military conditions of this plan have not been mentioned above, but on the many occasions where something very like it is being "explained" in closed meetings to members of the Israeli Establishment, this point is clarified. It is assumed that the Israeli military forces, in all their branches, are insufficient for the actual work of occupation of such wide territories as discussed above. In fact, even in times of intense Palestinian "unrest" on the West Bank, the forces of the Israeli Army are stretched out too much. The answer to that is the method of ruling by means of "Haddad forces" or of "Village Associations" (also known as "Village Leagues"): local forces under "leaders" completely dissociated from the population, not having even any feudal or party structure (such as the Phalangists have, for example). The "states" proposed by Yinon are "Haddadland" and "Village Associations," and their armed forces will be, no doubt, quite similar. In addition, Israeli military superiority in such a situation will be much greater than it is even now, so that any movement of revolt will be "punished" either by mass humiliation as in the West Bank and Gaza Strip, or by bombardment and obliteration of cities, as in Lebanon now (June 1982), or by both. In order to ensure this, the plan, as explained orally, calls for the establishment of Israeli garrisons in focal places between the mini states, equipped with the necessary mobile destructive forces. In fact, we have seen something like this in Haddadland and we will almost certainly soon see the first example of this system functioning either in South Lebanon or in all Lebanon.

It is obvious that the above military assumptions, and the whole plan too, depend also on the Arabs continuing to be even more divided than they are now, and on the lack of any truly progressive mass movement among them. It may be that those two conditions will be removed only when the plan will be well advanced, with consequences which can not be foreseen.

Why it is necessary to publish this in Israel?

The reason for publication is the dual nature of the Israeli-Jewish society: A very great measure of freedom and democracy, specially for Jews, combined with expansionism and racist discrimination. In such a situation the Israeli-Jewish elite (for the masses follow the TV and Begin's speeches) has to be persuaded. The first steps in the process of persuasion are oral, as indicated above, but a time comes in which it becomes inconvenient. Written material must be produced for the benefit of the more stupid "persuaders" and "explainers" (for example medium-rank officers, who are, usually, remarkably stupid). They then "learn it," more or less, and preach to others. It should be remarked that Israel, and even the Yishuv from the Twenties, has always functioned in this way. I myself well remember how (before I was "in opposition") the necessity of war with was explained to me and others a year before the 1956 war, and the necessity of conquering "the rest of Western Palestine when we will have the opportunity" was explained in the years 1965-67.

Why is it assumed that there is no special risk from the outside in the publication of such plans?

Such risks can come from two sources, so long as the principled opposition inside Israel is very weak (a situation which may change as a consequence of the war on Lebanon) : The Arab World, including the Palestinians, and the United States. The Arab World has shown itself so far quite incapable of a detailed and rational analysis of Israeli-Jewish society, and the Palestinians have been, on the average, no better than the rest. In such a situation, even those who are shouting about the dangers of Israeli expansionism (which are real enough) are doing this not because of factual and detailed knowledge, but because of belief in myth. A good example is the very persistent belief in the non-existent writing on the wall of the Knesset of the Biblical verse about the Nile and the Euphrates. Another example is the persistent, and completely false declarations, which were made by some of the most important Arab leaders, that the two blue stripes of the Israeli flag symbolize the Nile and the Euphrates, while in fact they are taken from the stripes of the Jewish praying shawl (Talit). The Israeli specialists assume that, on the whole, the Arabs will pay no attention to their serious discussions of the future, and the Lebanon war has proved them right. So why should they not continue with their old methods of persuading other Israelis?

In the United States a very similar situation exists, at least until now. The more or less serious commentators take their information about Israel, and much of their opinions

about it, from two sources. The first is from articles in the "liberal" American press, written almost totally by Jewish admirers of Israel who, even if they are critical of some aspects of the Israeli state, practice loyally what Stalin used to call "the constructive criticism." (In fact those among them who claim also to be "Anti-Stalinist" are in reality more Stalinist than Stalin, with Israel being their god which has not yet failed). In the framework of such critical worship it must be assumed that Israel has always "good intentions" and only "makes mistakes," and therefore such a plan would not be a matter for discussion--exactly as the Biblical genocides committed by Jews are not mentioned. The other source of information, The Jerusalem Post, has similar policies. So long, therefore, as the situation exists in which Israel is really a "closed society" to the rest of the world, because the world wants to close its eyes, the publication and even the beginning of the realization of such a plan is realistic and feasible.

Israel Shahak

June 17, 1982 Jerusalem